

大阪名門豪商による「共創」「共有」の象徴

～現・大阪商工会議所と日本綿花

鈴木商店と岩井商店は、ともに個人商店として発展したが、日本綿花は大阪の豪商を中心に25名が発起人となり、株式会社形態によって設立された。それぞれ異なる業種の豪商が、新産業の共創に向け手を組み、人脉、情報、知恵を共有した。その舞台が、五代友厚が提唱して設立された大阪商法会議所、現在の大阪商工会議所であったかもしれない。日本綿花設立の1年前に大阪商法会議所が大阪商業会議所に改組され、その際の発起人50人の内、10人が日本綿花の発起人と重なっている。

双日の中期経営計画2023では、「共創」と「共有」の実践を掲げている。これは双日グループ内のリソースの活用だけでなく、かつて大阪の豪商が手を取り合い、外国という大阪商人にとって未知の世界に挑戦するために日本綿花を設立したように、パートナーとの協力により新たなビジネス領域に挑戦しようとしている。



大阪商法会議所

■ 日本綿花発起人の群像

発起人の特徴として、両替商、木綿・絹・綿・足袋商、呉服問屋といった繊維関係商人、綿花栽培用の干鰯などの肥料を販売していた肥料商など、さまざまな業種の商家が参画している点が挙げられる。

両替商の代表格は、寛永2(1625)年創業で、三井・鴻池と並び日本屈指の豪商であった加島屋広岡家。幕末に神戸港が開港した際、幕臣・小栗上野介が鴻池や加島屋といった大阪商人に貿易会社である兵庫商社の出資と設立を命じ、加島屋当主・広岡久右衛門(正饒)ら3名が初代頭取に就任した。「商社」という言葉は、この兵庫商社が初めてといわれている。



加島屋(提供:大同生命保険)



日本綿花発起人のレリーフ

また、両替商としては、広岡信五郎の誣仲間の木原忠兵衛の銭屋がある。大阪財界三大巨頭といわれた田中市兵衛、そして金澤仁兵衛が営む干鰯商・肥料商は、綿花栽培用の肥料を販売していたと見られる。

日本綿花の発起人らは、銀行業にも積極的に進出し、発起人たちが設立した多くの銀行は、昭和8(1933)年に設立された三和銀行(現・三菱UFJ銀行)に合流していく。岩井商店の創業時からの取引銀行で、岩井勝次郎が役員を務めていた山口銀行も三和銀行設立母体の一行であり、こうした背景もあり、ニチメン、日商岩井両社、そして現在の双日も旧三和銀行の取引先企業によって構成されている「みどり会」のメンバーとなっている。